

## —怪談気象学—

NHK 放送用語委員会専門委員

元 気象庁天気相談所長

宮澤清治

### 無縁仏の涙雨

夏の夜は、とかく怪談がつきものである。気象に関係した怪談のいくつかを記して、納涼の特集としよう。

子どものころ、夏休みの夜に“肝試し”の遊びに興じたことがある。遊び仲間の餓鬼大将が近所の子どもを集めて、一人ひとりに次のように言い渡す。

「近くの墓に行って卒塔婆を担いで持ってこい」

「鉄道の無人踏切に行き、線路の石を拾って持ってこい」

真っ暗やみの中へ独りで行くのだから大変怖かった。昭和のひとけた時代は、世の中は不景気で、冷害が続き、食べていくのも大変だった。こんなこともあって、鉄道自殺が多く、線路は薄気味悪かった。

線路の石は、列車の鉄粉で赤いさびがついているから、ほかの石ではごまかしがきかない。ガタガタ震えながら、赤い石を拾ってきた思い出がある。

「おばけの正体」（井上円了著 図書刊行会）という大正初期に出版された本に、次のような鉄道に関する怪談がある。



写真1 蒸気機関車 (C62型)

—東京府下南千住町の法華庵は、昔の刑場がある小塚通りにあつて、境内や近所には千人塚、無縁仏などという囚人の亡魂を吊った墓がある。境内は雑木が生い茂つて大変淋しい所で、天気が快晴であるのにもかかわらず、樹木からポツリポツリと雨が落ちてくるのを近所の人が怪しんだ。

不思議だ、不思議だと、言いふらしたので、たちまち大評判となり毎日、黒山のような人だかりになった。昔、ここで首をはねられた囚人が無縁仏となり、得道解脱ができなくて、地獄の中で泣き叫ぶその涙が雨となって降ってくるのだと人々は哀れみ悲しんだ。—

識者がこの原因を調べたところ、次のよ

うなことだった。境内のすぐ北に日本鉄道(現 JR)の隅田川線の貨物列車が通る踏切がある。蒸気機関車が通るとき、汽缶(ボイラー)から吹き上がる蒸気が、木の葉にかかり、冷えて凝結し雨滴のように雫(しずく)として落ちてくるというわけ。

原因をよく正さないで、迷信を信ずるので種々妄想を生み、仏の涙と言ったものである。

### くぬぎ林の怪しき雨

元気象庁長官の畠山久尚さんの「気象とともに」という本(昭和 41 年 5 月, 地人書館)に前述の涙雨と似たような話がでてくる。

「昭和 34 年 12 月のころのことである。

東京・小田急の新原町田駅の近くにくぬぎ林があった。空は青空にかかわらず、くぬぎ林の中の歩道に沿って、長さ 20m・幅 5m の範囲だけ雨が降ってぬれている。

近くの滝のしぶきが上昇気流によって運ばれてくるとの説、くぬぎ木に付いている昆虫の出す液ではないかななどの憶説が飛んだ。新聞にでたり、ラジオで放送されたりしたので、多い日には 2,000 人からの見物人が集まった。

現地の町田高校の先生や東京管区気象台が調査したが、何かの目的で人工的に水をまいている人もいるらしいとの説もあった。

しばらく事態を静観することにしたところ、そのうちに、くぬぎ林は切り払われてしまったので、不思議な雨も自然に消滅してしまった。」

### 青い空から怪雪が降る

北海道旭川市の郊外にパルプ工場がある。冬のひどく寒い快晴の朝、工場付近だけに低い層雲(きりぐも)がかかり、小粒の雪が激しく降る。

知友の山本晃さんが、戦後旭川気象台に勤めていたころ、この現象を発見し、怪しげな雪を「工場雪」と名付けた。

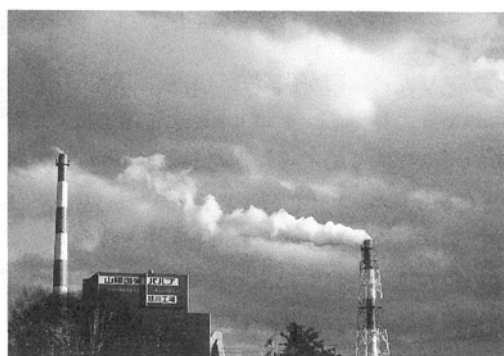


写真 2 山陽国策パルプ旭川工場(旭川市)

厳冬の朝、工場のあちこちから蒸気が多量に出ると、蒸気が冷えて凝結し、工場全体が霧に包まれたようになる。こんなとき、煙突から出る煙が霧の中を通ると、その付近だけで小粒の雪が降る。

おそらく、煙の中にある微小な氷の結晶などが、霧の中を通るとき氷晶が成長して雪と降ってくるものらしい。工場雪は、煙の直下だけで降る。地上の気温が氷点下 10℃ に下がる「日の出」の前後の数時間に降りやすく、積雪が 1cm になることもあるという。

真夏に雪の話、いくらか消夏になったでしょうか。